

最優秀賞

【学校経営】

未来を拓く学校づくり 朝鑑賞を土台とした チームミカジマの挑戦

埼玉県所沢市立三ヶ島中学校

ぬま た よし ゆき
沼田 芳行



1 はじめに

(1) 三ヶ島という地域

三ヶ島の地は埼玉県所沢市の西部に位置し、南に狭山丘陵を控え、北東に向かってなだらかに下向している高平な地区である。古くから製茶業が盛んであり、南側の狭山丘陵斜面では果樹栽培が行われ、東側には住宅地が広がっている穏やかな町並みである。

本校は昭和22年に開校、今年で72年目を迎える。生徒数423名、14学級（特別支援学級含む）の中規模校である。

(2) 学力向上を目指して

学力の向上は本校においても喫緊の課題である。「わかる生徒」の育成を目指し、授業改善を進め、基礎学力の定着へ向けた取組は全国どこの学校でも展開されている。

3年前の着任当時、本校生徒に対して「元気で明るい生徒。しかし、頭で整理し落ち着いて考えることに課題があるのでは」という印象をもった。そこで、本校生徒の実態把握を行った。「行事はがんばる、穏やかで人なつこい。反面、テストの点数に課題がある」ということが明らかになった。さらに、全国学力学習状況調査・埼玉県学力学習調査等の結果を分析した。すると、書く力と考える力に課題があることがわかった。このことから、考えることと考えたことを言葉で伝えていく力をつけるための手立て

を考案することにした。

目標とする生徒像に、生徒自身が確かな学力を定着させ、自分の口で自分が考えたことを筋道立てて話せるようになることを理想の姿として考えた。そこで、このことを具現化するために、これまでのドリル的な反復等による学習方法ではないものを模索した。そして、「旅するムサビ」等で芸術を媒介に特筆された取組をしている武蔵野美術大学 三澤一実教授（以下、三澤氏）に相談をした。

2 朝鑑賞の実践

(1) 朝鑑賞を始めるにあたって

平成27年度、武蔵野美術大学の協力を得て、「黒板ジャック」と大学生をファシリテーターに、作者とコラボレーションする総合的な学習の時間「対話型芸術鑑賞教室」を行った。

このスポット授業は、生徒の学習意欲の喚起につながった。生徒は初めて目にする世界に、食い入ってこの1週間を楽しんだ。特に芸術作品を鑑賞しながら、思ったこと・感じたことを、普段の授業では発言しない生徒が発言するなど、進んで意見交換する姿が本校の教職員に新鮮に映った。このことは、生徒の学習意欲を喚起させるのに、「これまでになかった新たな取組」として有効な手段であると考えたきっかけになった。

三澤氏からの提案は、朝の時間を使って、美術作品を鑑賞し「考える→考えたことを口にす

る」取組から始めることであった。生徒の学びに向かう力を高めるきっかけとして、これを「朝鑑賞」と名付け、朝読書の時間を週一度これに変え、「考えたこと」を「自分の口」で表現する活動を学校として恒常的に行うことにした。同時に校内研修で教師も「主体的・対話的で深い学び」の具現化へ向けて新しい学習指導要領の方向性を確認した。

また、教師もこれからの時代に求められる教師像に、ファシリテーター（人と人が学び合う場をつくり、その場が深まるように促す人）として、対話を通して生徒の探求心を育む力をつけることを目標に置いた。

(2) 朝鑑賞とは？

朝鑑賞は、朝学活の前（8：30～8：40）に朝読書に充てた10分間を使い、毎週金曜日の朝、担当の教師が絵画等の作品を各教室に持参し、全校で対話型芸術朝鑑賞を行うという取組である。これには、武蔵野美術大学、県立芸術総合高等学校美術科の協力の下、学生が制作した作品を借用し、実施する。

内容、方法は、学級担任を中心に美術作品を教室に持ち込み、教師がファシリテーターとなり、作品から見えるもの、色使い、自分の感じ方、作者の思い等を生徒が思い思いに発言する。教師は生徒の発言をつなげ、考えが広がるように働きかけ、生徒の対話力の育成をはかる。朝の10分間、教師と生徒、生徒と生徒が美術作品を媒介に対話をする。毎週の積み重ねがやがて対話力の育成につながる変化をもたらすことを仮説として取り組んだ。

答えのない美術作品を見て、感じたことを口にする。その言葉を聞き「どこから、そう感じたのか」と根拠を問う…これまでの授業で当たり前だった「答えがある問題に対し、正解を探す」活動とは全く異なる活動に、戸惑いを感じたのは生徒ではなく、むしろ教師のほうだった。それは、これまでの生業であるティーチャーではなく、ファシリテーターとしての役割が求められたからである。この活動の終末に、教師が

一つの「解」を出しまとめたい気持ちを抑え、「どうなのだろうね…」で締める10分間の活動。この毎週10分間の取組を苦痛に感じたり、不安に思ったりする教師は少なくなかった。

試行錯誤の中で始めた取組の成果はなかなか見えてこなかった。しかし、朝鑑賞を始めて3か月が経過した平成28年7月、朝鑑賞アンケートを実施したところ90%の生徒がこの活動を肯定的に捉え、自由記述欄に前向きな言葉が並んだ。生徒の感性はしなやかであった。



- ・美術館に行っているみたいで楽しい。
- ・みんなの感じていることと、自分の感じていることが同じだったり、違ったりして、沢山の見方や考え方をして見る事が出来たので楽しかった。
- ・もう少し時間がほしい→しゃべっていると時間があつという間に終わるから。

(3) 朝鑑賞を進めていく中で

「同じ教師（主に担任）が行っていると、どうしても進め方や問いかけるリズム・空気感が同じになってしまい、マンネリ化する」という意見が教師から挙がった。生徒の発言のつむぎ方、引き出し方に教師自身の課題が生じてきた。

この取組を通して、控えめな子、学習に自信のない子たちへの配慮の必要性、言葉は発しなが考えている生徒をどう見とるか等、複雑な見方が必要になってきたのである。そこで、学年でローテーションを組み、毎週異なる教師がファシリテーターになるようにし、校長や教頭の管理職も含め、学年が異なる教師が入るなど、教師全体で取り組む活動にしてみた。校長の私

も自ら全校朝会を活用し、「全校朝鑑賞」を行った。

(4) 朝鑑賞の評価

朝鑑賞と学力獲得との相関関係を見出すため、鑑賞教育のオーソリティである聖徳大学 奥村高明教授（現日本体育大学、以下奥村氏）に依頼し、朝鑑賞の学習評価、ループリックの作成と分析を依頼した。ループリックは、パフォーマンス評価の一つであり、四つの観点の学習状況を自己評価するものである。これを学期の終わりに教師、生徒に対して実施した。

奥村氏の分析の結果、学年に応じて、かなり明確な発達の違いがわかった。特に3年生はメタ認知が進み、「話し合うことで対話が深まり多様性を認める」というところまで進んだ。奥村氏から、「朝鑑賞のファシリテーションにはコツが必要で、これには複雑な技術を要する。例えば、複線的なドラマに慣れている若い世代は、メタ認知がはたらき、上手くいく（事実と抽象という概念的な知識←これを上手に考えられる）」と示唆いただいた。

(5) 朝鑑賞から見えてきたもの

対話型芸術朝鑑賞は、これまでの学校での授業と異なる。美術作品から見えてくるものは、全部が根拠のある「解」とであるという性質をもつ。色、形、見える事象…、朝鑑賞は、このことを、論理的に組み立てる訓練（考え方を学ぶ）、そして、まとめるという作業である。このことを繰り返して実施していくことで、生徒は、論理的思考力が育まれ、研ぎ澄まされていく。ゆくゆくは広義の学力が伸びていくという仮説を立てた。なぜなら、論拠に基づいた表現を身につけていくからである。

実際続けてきた教師の感想として、次ページに掲げたような声が挙がり、また、生徒自身、自分の発言が肯定されていく喜びを実感すると共に他者の発言を聞き他者理解を深め、人間関係づくりにも力を発揮し、「学びたい・知りたい」という気持ちの芽生えにつながった。このことが主体的な学びにもつながる。それは作品を見ることを通して、様々なことに疑問をもつようになるからだと考えられる。

| 年 組 番 氏名 | | | | |
|--|-------------------------------------|--|--|---|
| 朝鑑賞のループリック | | | | |
| 【3学期の「朝鑑賞」を振り返り、自分自身でできたところまで、文章に○をつけましょう】 | | | | |
| 観点 | 第1段階 | 第2段階 | 第3段階 | 第4段階 |
| 形や色など 作品の特徴のこと | 作品から、 <u>気になること</u> を見つ けることができる | 作品から、 <u>形や色などの特徴</u> を見 つけることができる | 作品から、 <u>形や色、動き、方向などい ろいろな特徴</u> を見つめることができる | 作品から、形や色、動き、方向などいろ いろな特徴や、 <u>それらが生み出す感じや効果 など</u> を見つめることができる |
| 作品について 話し合うこと | 作品について <u>話したり聴いたり</u> できる | 作品について、 <u>自分の感じたこと</u> を話したり、 <u>友達の考え</u> を聴いた りすることができる | 作品について、友達の感じたことや考 えたことを聴き、 <u>自分の考えとの違い</u> <u>に気づく</u> ことができる | 作品について、友達の感じたことや考えた ことを聴き、 <u>自分の考えとの違いを認め、 友達の考えの良さや特徴をつかむ</u> ことが できる |
| 自分の考えを 組み立てること | 作品について <u>自分の考え</u> を持 つことができる | 作品の形や色などを根拠に <u>自分 の考え</u> を持つことができる | 作品の形や色、友達の意見などいろい ろなことを根拠に、 <u>自分の考え</u> を組 <u>み立てる</u> ことができる | 作品の形や色、友達の意見などいろい ろなことを根拠にした自分の考えを、 <u>変化させ たり深めたりしながら、組み立て直す</u> ことが できる |
| 学びに向かう力が ついていること | 朝鑑賞に <u>取り組む</u> ことができ る。 | <u>進んで朝鑑賞</u> に取り組み、 <u>自分の 考え</u> を持つことができる | 進んで朝鑑賞に取り組み、自分の考 えを持ち、 <u>友達の考えと比較して協同 性や多様性を学ぶ</u> ことができる | 進んで朝鑑賞に取り組み、自分の考えと 友達の考えを比較して <u>協同性や多様性を 学び、他の学習や活動に活かす</u> ことが できる |
| 『朝鑑賞』を通して、自分が成長できたと感じることはなんですか？ | | 『朝鑑賞』について、思っていること・感じていることなどを自由に書いてください | | |

- ・小グループで行う学習のハードルが下がった。
- ・答えのないことに慣れてきた。
- ・互いを認め合う、誉め合う助言が増えた。
- ・自然と他者を認め合っている。
- ・物事を言うことに対するハードルが下がった。
- ・教師自身のファシリテート力がついてきた。
- ・聞く力が高まっている。
- ・ベテランほど難しい（これまでの指導スタイルを変化させることに抵抗を感じる）。

(6) 教師の変容

教師は、試行錯誤を通してファシリテーターの能力を身につけ、教師力を磨いた。教師のスキルアップのために月1度の校内研修でも朝鑑賞をテーマに取り上げた。

研修では互いに「対話」するよう、小グループに分かれて行った。この積み重ねと、毎週、取り組んだことで朝鑑賞がルーティンの取組になり、朝の10分の活動が本校としての教育活動のベースになった。

私たちはこの取組を「三ヶ島アートプロジェクト」と名付け、本校の「カリキュラム・マネ

ジメント」とした。

アートプロジェクトと命名した理由としては、三澤氏が語った「アートは常に革新的で人を感動させると共に、批判的思考（クリティカルシンキング）の側面をもっている。このように教師自身も今の教育をしなやかに捉えなおし、子どもたちと共に感動し、常に新しい学びへの創造性をもつ」という思いを、これからの時代に必要な資質として伸ばさせたいと考えたからである。

(7) 生徒の変容

朝鑑賞の取組は今年で3年目を迎えた。「学力向上」を第一義に考え、取り組んできたが、こちらが考えていた以上に、複合的な力を子どもたちが獲得した。

今年の6月に校長が3年生と面談をした際に、朝鑑賞から得た力として、下に掲げた言葉を生徒が語った。特に「人には様々な感じ方があること、そのよさは話してみないとわからない」など、生徒が寛容さ、多様性など、他者理解の上で必要とされる要素を身につけている様子が見られる。

しかし、各種学力調査等の結果を分析すると、知識を増やすことには課題が見られる。

- ・考える、深く考える習慣。
- ・物事を広く見ることができるようになった。
- ・考えたり、話し合ったりすること。
- ・観察力。
- ・大人と話すのが苦手だったが話ができるようになった。今までは大人と話すことと叱られることが多かったので正直逃げていた。けれど、この時間のおかげで会話ができるようになった。
- ・文章を読み取る力。
- ・絵をみて言葉にする力。
- ・話しかけられたことに返すことができるようになった。いちばん良い時間。
- ・発言力
- ・考えるクセがついた。
- ・自分の見方にとらわれず新しい見方ができるようになった。人ひとりひとりが違うということ。こんなに人のことを考えられる時間はない。おかげでいろんなことがわかるようになった。
- ・間違えても大丈夫だという勇氣。
- ・人の考えていることは話してみないとわからない。おかげで観察力がつくようになった。今までは周りで何が起きていても気づけなかった。今は周りを見なくてもはと自覚しなくても、気づくようになった。
- ・ものとのらえ方と見方＝複合的な観察力
- ・想像力がついた。表現の仕方にはいろいろあること。人と人がつながり、相手の意図をくみ取る力。この活動がなかったら、そうした力がついていないと思う。
- ・自分の思いを皆に伝えられる時間と他の人の意見を共有するという力。
- ・発表する力。これがなければ黙っている自分の方が多かったように思う。違ったらどうしよう？とか失敗を恐れていた。



3 チームミカジマをつくる

(1) 学習指導要領の肝を押さえる

学習指導要領が「学びの地図」となるよう、本校ではこの「三ヶ島アートプロジェクト」を軸に新学習指導要領の趣旨に倣い、生徒の実態を押さえ、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化をはかる「カリキュラム・マネジメント」を進めてきた。開かれた教育課程の具現化へ向け、まずはすべての教育活動は「子ども（生徒）が軸である」ことを押さえた。

(2) 校長はどのように舵取りをするか

学校は目標に向かって、教職員が教育活動を営む組織体である。学校の教育力を高め、教職員の専門性を発揮するにも、その教職員がお互いに磨き合い、協働性を発展させていくことが重要である。このことが「チーム学校」につながる。

校長として着手したのは、中学校教師のもつ一人一人の多様な能力と専門性を教育活動においてそれぞれがつながる仕掛けを考えたことである。それには、まず、実践家である教師の教育活動を研究者とつなげ、常に実践と研究、評価とフィードバックを行ってきた。

また、獲得した力を「学力の向上」につなげるため、様々な外部講師に授業に参加してもらい、学校の教育活動を膨らませた。このことは具体的な実践の項で述べる。

これまで、中学校の教育研究は教科に特化しがちで、専門性の垣根を越えるのが難しかった。しかし、新学習指導要領が施行され、各教科の観点が揃った。これは各教科の手法を全員の教師が共有するチャンスであると考えた。毎週金曜日の1校時目に定例の研修部会を設け、チームとして本音が言える教師の組織を目指すこととした。

(3) 目指す学校像の共有化

本年度、「活き活き元気三ヶ島中！」の学校キャッチフレーズを、「未知知を拓く三ヶ島中学校」に変えた。

「考える→考えたことを口にする」取組が一定の成果をあげ、より生徒の主体的な学習活動に結びつけていくためである。

4月の学校だよりを使い、地域にも目指す学校像を共有できるように宣言した。

生徒は、朝鑑賞を通して、自分の発言が周りに受け入れられる安心感を獲得してきた。そして、朝鑑賞で身につけた対話のスキルを総合的な学習の時間に生かしてさらなる実践につなげていくことにした。

私たちはチームミカジマの力を高めるため「朝鑑賞」という教育活動の共通ベースで意思疎通をはかってきた。

このことで、我々自身も互いの「よさ」を理解し、職務上でつながった。

三ヶ島中学校 校長 加藤 啓

未知知を拓く

本年度より長く続いた「活き活き元気三ヶ島中！」の学校キャッチフレーズを、「未知知を拓く三ヶ島中学校」に変え、目指す学校像として深化させていきます。

「未知知」を具現化してみます。
明日という「未知」は、今日の自分より成長していきます。どうして？って、それは、1日過ごすことで「学ぶ」自分と出会うからです。この積み重ねが、自分の年齢になっていきます。自分の考えを広げていくベースになるものです。

「知」は「学び」と置き換えてみます。この「学び」は、学校で体験し、経験するすべてのことから指します。いやほ自分の関心や知識範囲に留まらず、学校から一歩飛び出すとそこには「三ヶ島のまち」があります。社会を担う一員として、中学生である自分たちが培った「未知知」の学び（各教科の勉強、道徳、学級活動、総合的な学習の時間、様々な体験活動、部活動、委員会活動、学校行事、地域活動…）をもとに、「まち」へと自分を拓いていく。そんな道筋を学校から発信していくのが、これからはじまる「みかじまの物語」です。

ひとりひとりが主体となって、大人も子どもも「つながり」、ひとりひとりを尊重して、互いの「よさ」を見つけていく。中学校からそんな道筋を歩いていくことを今年の大きなテーマにさせていただきます。また、「自由であり平等である」という社会の本質を、互いの「よさ」を見つけて共有化することで、人にも自然にも優しい社会の発展に向けて、学校文化を築いていけたらと考えます。もう少しわかりやすく述べると、自分と他の人の「違い」を理解し、相手を認めていくという態度を磨いていくということです。いじめにつながる意地地は必然として減っていきます。人との温かな関係が育っていきます。これには毎週金曜日の朝10分間に行う「朝鑑賞」で培う力がとても有効であると考えます。これまで2学期の「本校教育研究（三ヶ島アートプロジェクト）」で明らかになりました。「<互いを知る>」ことで安心する空間が生れる。安心は各自の心を緩やかにし、一歩踏み出す「勇気」を育める。誰もが活躍できるそんな学校づくりを進めてまいります。

様々なことにチャレンジし、失敗も楽しんで、成功の喜びを半に入れ、時には「鳥の目」で自分が進んでいることを確かめ、「考えることの意味」を再んていきたいと思います。子どもたちだけのことではありません。私も奮発した大人たちも大きくチャレンジしてまいります。

さあ、今年度の個々の目標を定めてみましょう。できるだけ具体的に。そして、積み重ねていくことで目標が達成できるような形にしましょう。3月にはお互いに自慢してみたいものです。

(4) シンクタンク研修部会

すべては「子ども」を軸に「教師が変わる・授業が変わる」を合い言葉にして、研修部会を通して、定例の研修を積み重ね、組織力を向上させた。メンバー構成は保健体育の教師を研修主任にし、国語、社会、家庭、音楽とした。

これは「専門性」をそれぞれの「個性」として、異なる教科で授業研究の取組ができるチー

ムにするためである。生徒が「生きる力」を育むためには、生徒を多面的多角的に捉える必要があり、そのためには教師のもつ専門性を連関させ、総合化させなければ、生徒の「個性」を生かし、伸ばしていくことにはつながらないからである。始めた当初は、「他教科のことはよくわからない」等、それぞれの意見がかみ合わず苦しい思いもしたが、全員が取り組む「朝鑑賞」がベースとなり、共通の問題解決がはかれた。

昨年は32回にわたり研修部会を行った。こうして、専門教科を超えた「授業研究」のベースを創りあげた。各教科の授業が生徒主体に「考えること」を大事にしながら改善されていった。

今年度は各教科が連携し、カリキュラムづくりを行う「カリキュラムデザイン※横浜国立大学教育学部附属横浜中学校研究による」に主眼を置いた。生徒は9教科の学びを通して「確かな学力」を身につける。それぞれの教科が専門性にこだわるあまり、共通性を見逃しては「よさ」は伸びていかないと考えた。そして、各教科の年間指導計画が一覧でわかるマトリクスをつくり、共有した。このことにより、教科間での連携がさらに進んだ。

また、教師のもつ専門性を共有しようと職員室にそれぞれの教員のプロフィールコーナーを設置したり、研修部の作成した成果物を職員室内に掲示したりと工夫した。

同じ題材で授業案をつくるとどのように教科の特性が発揮されるかという研修を行った。「カリキュラムデザイン」につながり共有する材料が増え、成果となった。

この研修部会は、私たち自身の教師力を磨く「シンクタンク」であり「エンジン」となった。今や、この研修部会の時間を部員は「楽しみでワクワクする時間」と感じている。



4 具体的に実践してきたこと

(1) 対話型芸術鑑賞教室

朝鑑賞を行うために、元々本校にあった空き教室を改造した「ギャラリー」というスペースを活用して、「むさしの美術館」をオープンさせた。現在、ここには武蔵野美術大学学生、県立芸術総合高等学校美術科生徒の40作品ほどを展示している。

そして、年に1度、作者に来てもらい、作品を媒介に対話する「対話型芸術鑑賞教室」を行っている。この授業を体験した生徒は、以下のような感想を述べた。

- ・この教室をとおして少し違う見方が人それぞれにあると考えた。
- ・人それぞれが違うということ、鑑賞って楽しいのだとわかったこと。
- ・自分の意見だけでなく相手の意見をまじえながら考えていきたい。
- ・一つの作品に対していろいろな意見を言い、対話してということがとても勉強になった。
- ・作品の一つ一つに自分に偽りのないそのままの「心」が表現されていて、興味深かった。
- ・自分の意見が受け入れてもらえてうれしかった。
(生徒の感想より)

このような感想からも生徒の人間関係づくり、感性を磨くことにも大きくつながっていることがわかった。

(2) 教科間連携（コラボレーション）から生まれた授業実践

新しい学習指導要領の趣旨を生かし、教科・領域間での内容の関連づけを重要視して、学校全体でカリキュラムの調和をはかるため、可能な教科からコラボレーションした授業づくりを進めている。

例として、保健体育科のマット運動やダンスの単元で美術科、音楽科と連携した。特にダンスの単元では、朝鑑賞で使用した絵画作品を題

材に、グループで情景を考え、動きをあてはめ、音を用い、試行錯誤して作品にする創作ダンスの授業を行った。



この授業では、生徒は自分たちが主体的に「学びの地図」を描き、自ら学習を進めていく醍醐味を味わった。生徒が「やりたくなる気持ち」になったとき、授業はひとり歩きする。その際、教師がファシリテーターとなり、生徒の学びを支える。自ら歩む「楽しみ」に、知的好奇心がくすぐられ、学びに向かう力が大きく高まった。

生徒にとっても、各教科の学びが一方向性のものではなく「つながる」ことを実感できる授業実践となった。生徒も教師も朝鑑賞で得た力で教科横断的に「つながる」を体感した。

下に掲げたのは、授業後の教師の感想である。

この単元の目標がある。それを達成するのに、生徒が今まで培ってきた力を生かすには、と考へ「2年間積み重ねてきた朝鑑賞」に目をつけた。絵を観ながらグループで対話を重ね、ストーリーをつむいでいく。朝鑑賞で鍛えてきた彼らにとって腕の見せどころだ。ここから身体表現に結びつけていくのが一つの壁。それにはダンスを専門に学ぶ高校生の力を借りよう。その刺激が彼らの力をさらに引き出してくれるだろう。教員の役割は教え導くというより「学びの場をコーディネート」すること。そう教員の意識が変わったとき、学びに向かう生徒の顔つきも変わってきた。

(3) 異校種との連携実践

武蔵野美術大学との連携により、クリエイターと身近に交流できるようになった（朝鑑賞、

黒板アート、対話型芸術鑑賞教室）。同じように県立芸術総合高等学校の美術科、同舞台芸術科の生徒をゲストティーチャーに授業を行うことができた。専門性に触れ、生徒の活動は充実した。

次に、小学校との連携は、本校生徒が小学校に赴いての朝鑑賞の実施、保健体育科の出前授業、小学校への体育朝会への出席、そして、教員全員参加による合同研修会の実施と連携が進んだ。中でも朝鑑賞の出前授業を生徒自身の発案で、生徒自身が実施できたことは特筆される。

次に、幼保との連携は、校区のこども園に3年生全員が家庭分野の保育単元で実習に出かける（2時間扱い）。幼児と直接触れ合うこの実習は、わずか2時間で生徒が大きく変容する。それは「学びたい」気持ちが前面に出ての学習になるからである。この保育実習の前には、こども園園長による出前授業を行っている。このことも生徒の大きな動機づけとなった。

これまで、学校の外の世界との連携はどうしても生徒が受け身になる活動が多かった。しかし、朝鑑賞の取組により発言も増え、生徒に自己表現の意欲が芽生え「もっと学びたい」「体験したい」という意識で地域との能動的な連携へと進化した。このことが「社会に開かれた教育課程」の具現化につながった。



(4) 授業が変わった

生徒主体の授業づくりを工夫するため、授業の構造化に取り組んだ。

朝鑑賞で身につけたファシリテーションスキルは、授業の場面における教師の発する言葉としても、正解主義ではなく、生徒の思考をつなぐ投げかけを可能とした。

何より、それぞれの教科の単元計画が「(生

徒が)めあてを理解し、見通しをもち、生徒自身が振り返ること」を可能にするものへと変わった。

生徒の「学びに向かう力」を高めるためのゲストティーチャーの活用も積極的に行われ、技術科では木工の授業に地域の大工さんOBを、社会科の授業では公共機関の職員を、道徳の時間にはNPO職員をと、活用が広がった。

また、デジタル教科書をはじめ、ICT機器の活用も積極的に行われている。

5 総合的な学習の時間で地域とつながる

- 1年生『みかじまの歴史と自分』 三ヶ島の歴史や人々にスポットを当て、CM動画にする。
- 2年生『みかじまの現在と自分』 三ヶ島の今を、職場体験を通して明らかにする。
- 3年生『みかじまの未来と自分』 三ヶ島の未来を、防災や福祉、育児等を視点に考えてまとめる。

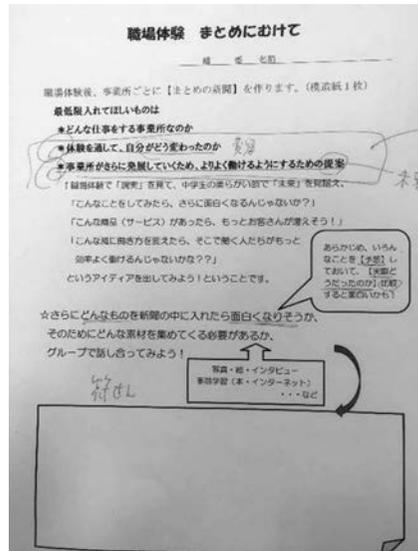
本年度、カリキュラム・マネジメントの一端として、各学年の総合的な学習の時間に「〈地域とつながる〉みかじまタイム」として、地域の特性を生かし、テーマをもって探究する学習を行っている。それぞれのテーマに応じて調べ、情報を集めてまとめ、三ヶ島の歴史や今、そして未来に対して学び、学んだことを提言できる取組につなげている。

この「三ヶ島アートプロジェクト」の成果は、総合的な学習の時間の活動が単にその年の計画をやりきるのではなく、思考の視点が加わるようになった。

写真は、2年生の「総合的な学習の時間」のまとめプリントであり、活動によって(生徒自身)、「自分がどのように変容したか?」「自分の体験により未来像をどう描いたか?」の2点を大切にしている。また、体験する前に予想し、実際と比較することで体験を精査する構造のものとなっている。

生徒が主体的な学習を進めていく上で、こうした発問の工夫は大事な要素である。

チームとしての力は、このプロジェクトを通して大きな力となり、成果につながった。



6 終わりに

学力向上という喫緊の課題を踏まえ、生徒に自ら考えて行動できる力をつけたいという思いからスタートさせた、朝鑑賞を始めとする三ヶ島アートプロジェクトである。

この取組内容の一つ目は、思考力・表現力に視点をあて、覚えたことを再現する知識理解に重きを置いた学習からの脱却をはかってきたこと。二つ目に、中学校で各教科の授業をつなぐ共同研究ができたことである。

学校では、協働する組織力、チームワークが大きく求められる時代である。教科を超え、授業研究組織として私たちの資質・能力の向上につなげることができた。

本校の子どもたちは朝鑑賞を通して「自分の頭で考える→考えたことを言葉にして発信する」練習を繰り返し、繰り返し行った。このことにより、各教科の授業で、生徒が主体的に発言する場面が大きく増えた。そして、新学習指導要領の目指す方向性を私たち教師が共有化し、

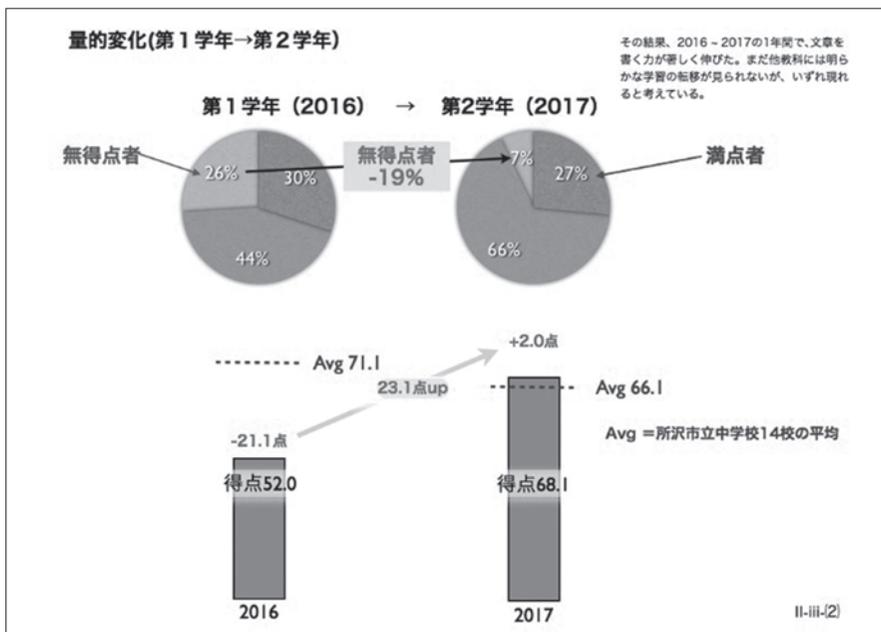
「学びに向かう力」を高めるために授業改善が進んだ。

このことで「授業研究」に力点を置くことを可能とした。生徒自身の変化に押されるように、教師の行う授業も大きく変わった。指示や指導の声が中心の授業から、生徒の声が必然と聞こえる授業へと、大人も含め相互の学び合いを可能とした。

学力は下図のように「書く力」に特化した伸びも見られる。

しかし、知識を増やし、いわゆる地頭を磨いていくことにはまだまだ課題がある。このあたりは引き続き、ドリル練習等の反復活動を大切にしていくことも両輪として重要であることが明確となった。

例えば、語彙を増やす、公式を理解する等の



基礎的基本的な事項を身につけ、「やり方がわかる」ことについて、引き続き全校で取り組んでいく必要がある。

私たち自身、中学校でここまでの授業研究につながられたことは自信になった。生徒も、自ら考え課題に向かう授業の楽しさを実感的に理解できてきた。

朝鑑賞をベースに始めた本校の「カリキュラム・マネジメント」は、今後も一層「何を学び・どのように学び・何ができるようになるか」を軸に、授業改善と学校改革に取り組んでいく。

結びに、本年7月発行の学校だよりに掲載した3年生女子生徒の感想を付け加える。これは、進路選択へ向けた校長面接的一幕で、日頃はおとなしい女子生徒が語ってくれた言葉である。

「この時間は自分と向き合い考えることのできる貴重な時間です。この時間があるからふと立ち止まったり、友達のよさを見つけたり、友達の意見に対し『そうだね』と共感できたり。だって、思春期の自分たちが素直にありのままを答えるのは恥ずかしいときもあるし、難しいこともあるし。意見が出なくても、感じる心と考える力は着実にあります」

チームミカジマの挑戦は続く。

| 平成28年度 | 平成29年度 | 平成30年度 |
|--|--|---|
| 生徒・教師の伸びた力 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・発言力 ・書く力 ・待てるようになった | <ul style="list-style-type: none"> ・発表する力 ・発想力 ・他者理解 ・教科を超えた連携 ・A L的な授業の手法 ・授業の構造化 | <ul style="list-style-type: none"> ・考える力の伸び ・部活動に成果 ・思考力の伸長 ・個性を認め合う ・逆転の発想 ・発問の進化 ・チーム力の向上 ・授業改善進む |